

“自主創造”のための



Learning Guide



2019

日本大学 FDガイドブック

日本大学での学びの基本がわかる本 (保存版)

“自主創造”のための

Learning Guide

2019 日本大学 FDガイドブック

日本大学での学びの基本がわかる本（保存版）

4年間の学び方や取り組み方がわかる！

新入生のための Learning Guide **コンテンツNavi**

日大生なら知っておきたい、
心がまえや特色ある学修制度

大学生になる。
楽しみだけど、
どういう気持ちで
臨めばいいの
かちょっと不安



日大生は
“自主創造”の
精神で！

日大生としての自覚をもち、
日々の学生生活とどう向き
合えばいいのかについて、
参考にしてください。

詳しくは、P.10 / P.22へ▶

おもしろそうな
活動に
参加したいなー

みんなで日本大学
をつくろう！
みたいな
活動があります

- 日本大学 学生
FD CHAmiT

詳しくは、P.6へ▶

日大 講義 通題？

日大に通う意義、
そろそろ知りたくない？



新入生
16,000人！
他学部の学生
と交流したい

そのアイデアと
意欲に
日本大学が
協力します！！

- 日本大学自主創造
プロジェクト


詳しくは、P.7へ▶

他学部
の友達100人
できるかも!?
前代未聞の授業

- 日本大学
ワールド・カフェ

詳しくは、P.5へ▶

社会や環境を
より良くする
自主活動を
してみたい



**時間割の
組み立て方を教えて！**


履修したい科目はウェブで登録。授業内容を示したシラバスをみてみましょう。教職員が相談にのることもできます。

詳しくは、P.30へ▶



**高校の授業とどんな
ところが違いますか？**

大学の授業は自ら「考える」「理論を立てる」ことを行います。ディスカッションやプレゼンテーションなど実践スタイルで学ぶことも多くなります。




詳しくは、P.35～P.41へ▶

**授業についていけない…。
もう少しこのところを
教えてほしい…。
先生は相談に
のってくれるかな？**

教員と直接話ができる時間を設けたオフィスアワーや、相談内容に合わせて適切な機関を紹介するインターカーなど、教職員があなたをサポートします。


詳しくは、P.23～24へ▶



**成績はどのように
つけられるのですか？**

課題やレポート、試験などで評価することが多いですが、授業への出席は原則。ただし重要なのは授業への「理解度」です。

詳しくは、P.52へ▶



**授業とアルバイトを
両立するには
どうしたら
いいでしょうか？**

アルバイトやクラブ&サークルなどの課外活動は、大きな経験知となりますが、きちんと単位修得ができるような履修計画と1週間のスケジュールを組み立てることが重要です。

詳しくは、P.25へ▶


**授業、成績、課外活動など
学生生活のあれこれは、
“Learning Guide”を上手に活用！**

**学生生活についての
様々な相談事はどこへ行けば…**

相談事の内容によって、様々な窓口や制度があります。充実した学生生活を送るために、活用してください。



詳しくは、P.59へ▶



**効率的なノートの
取り方ってありますか？**

講義は教員によって、スタイルも教材も様々。要点がバラバラにならない工夫が必要ですね。先輩の経験を参考してみるといいでしょう。

詳しくは、P.37～39／P.46へ▶

大学と学生が響きあう学修

日本大学は，“自主創造”を教育理念に掲げています。それは大学が一方的に「与える」ものではなく，学生も考える，大学と学生が意見を出し合うことから本当の“自主創造”が生まれると考えています。日々の学修や活動の中で，皆さんが関連に意見を言い，視野を広げ，成長していく。日本大学にはそうした人間性を高める学びの機会が多々ありますので，皆さんも積極的に参加してください。

日本大学が育成を目指す人間像

日本大学では，教育理念「自主創造」の下，教育を展開しており，激しく変化するグローバル社会，不確実性の高い社会環境，価値観の変化，突発的な天災などの状況下においても自ら考え行動できるような，卓越した創造力・判断力・コミュニケーション力等を持つ，人間力豊かな人間を育成しています。「日本大学教育憲章」（p.16 参照）ではそうした人間像を「日本大学マインド」として具体的な到達目標に掲げ，それを基に大学は必要なカリキュラムを展開しているのです。

また，「日本大学マインド」を備えた人間となるには，大学の講義だけでは身に付かないこともたくさんありますので，積極的に課外活動に参加し，大学生生活を有意義なものにしてください。

全学共通初年次教育科目「自主創造の基礎」 日本大学ワールド・カフェ (通称: N-MIX)^{えぬ みっくす}

約16,000人の新生と交流する、 スケールメリットを生かした授業

日本大学は、16学部86学科を擁する日本最大級の私立総合大学です。全国各地から様々な目標を持った仲間が集まってきています。地理的に遠い学部もありますが、全学共通初年次教育科目やゼミナール、サークル活動などを通して交流することができます。

交流の機会の一つである、全学共通初年次教育科目「自主創造の基礎」は、本学では初年次教育として展開している科目です。

この授業では、大学で学ぶ意義や、レポート作成、プレゼンテーション方法等大学生としての能動的な学修方法を学ぶほか、多様な価値観や考え方に触れるとともに、チームワークを磨くことを目的としています。

この授業の中には「日本大学ワールド・カフェ」という回が設定されています。様々な学部の学生の集まるグループに分かれて、「カフェ」のようなリラックスした雰囲気の中、意見交換をします。約16,000人の1



参加者が
語る

ワールド・カフェの 魅力とは？

国際関係学部 中村春奈さん



◎初対面の人とうまく話ができる
か心配していたのが嘘のように、
楽しい時間でした。外国人との
交流が多い学部なので、コミュ
ニケーション力を高めたいと思い
ました。

医学部 望月皓介さん



◎学部ごとに学生のカラーも異
なり、総合大学を実感した機会
でした。芸術学部の学生たちか
らは、芸術を追及する姿勢を学
びたいと思いました。

生物資源科学部 中村龍輝さん



◎他学部の学生の前向きな姿勢
に刺激を受けました。意欲的な
仲間がたくさんいるんだと感心し
ました。

年生を対象に文系、理系、医療系の学部の垣根を越えて交流を持つことができる、本学ならではのスケールメリットを生かした授業となっています。ワールド・カフェの実際の様子は、本学ホームページで動画を公開しています。ぜひご覧ください。

日本大学ワールド・カフェ
ホームページ



学生と教職員が、大学の教育について語り合う 日本大学 学生FD CHAmMiT

授業を受ける側の学生の 視点が重要

大学の授業をより良くするための代表的な活動にFD (Faculty Development) があります。日本大学では、FD活動を教員個人が取り組むものではなく、学生、教員、職員の三者が一体となって組織的に展開するものと位置付けています。その中で、学生が果たすべき重要な役割は、授業の進め方や内容について授業を受ける側の視点から提言することです。それを生かして、大学教育を改善していくことの意義が本学では認識されています。

日本大学FD推進センターでは、2013年度より、学生・教員・職員が一堂に会して本学の教育について気軽な雰囲気ですり合う、「日本大学 学生FD CHAmMiT」を開催しています。自身が受ける教育の質やその改善について関心を持つ学生が、1人でも多くなり、さらにその裾野を広げるための活動として位置付けています。6回目となる2018年度は「完全攻略ぼくらのマナビルート〜必須アイテムコンプリート編〜」をテーマに、芸術学部江古田キャンパスにて開催されました。



2018年「完全攻略ぼくらのマナビルート〜必須アイテムコンプリート編〜」の告知ポスター

学生スタッフ
が語る

学生FD CHAmMiT 2018
で総合大学の規模を実感

商学部 経営学科 1年 竹田 匠さん



◎職員の方から、学生が主体となって学びについて考え、イベントを創り上げる学生FD活動があるということを知り、やってみようと思ったので参加しました。

様々な学部・学年の学生スタッフや教職員と一緒に活動して感じたことは、全学部の学生と学年を超えて協力して一つのものを創り上げる、そんな活動はなかなかできるものではなく、総合大学としての規模をも実感しました。CHAmMiTを通じて貴重な経験と仲間、良い刺激を受けることができました。

ト〜必須アイテムコンプリート編〜」をテーマに、芸術学部江古田キャンパスにて開催されました。

学生主体の FD活動を今後も推進

学生FD活動は、全国の大学で展開されていますが、本学では組織的な対応を重視し、よりよい教育を目指した活動をしています。CHAmMiTをきっかけにして、各学部におけるFD活動が広がりを見せ、各学部の特徴を生かした活動を行っています。詳しくは下記ホームページをご覧ください。

日本大学 学生FD CHAmMiT
ホームページ



日大生の“やってみたい!”を実現する 日本大学自主創造プロジェクト

自ら学ぶ,自ら考える, 自ら道をひらくの実践の場を提供

“学生の発案”を大学がバックアップをする,「日本大学自主創造プロジェクト」が2019年度からスタートしています。日本大学の授業で得た学びを実践の場で生かしていく力を培い,教育課程と正課外の双方による広義の教育を充実させ,より深みのある教育を実現させるための新たな制度です。

これによって,具体的には以下の2つの成果につながることを目指しています。

- ◎日本大学教育憲章「自主創造」の3つの構成要素「自ら学ぶ,自ら考える,自ら道をひらく」能力を実践の場を通じて高める。
- ◎学生の学部間交流を推進し,多様性に対する気付きを与え,自らの専門科目の学修をより深化させるための一助とする。

募集対象となるプロジェクトは,日本大学の目的(日本大学は日本精神にもとづき道統をたつとび憲章にしたがい自主創造の気風をやしない文化の進展をはかり世界の平和と人類の福祉とに寄与することを目的とする)を実現させるものに設定(右記参照)しました。学生の皆さんのご応募をお待ちしています。



募 集 概 要

◎応募資格

- 日本大学の学部・大学院・短期大学部及び附属専門学校の正規生で構成されていること。
- 2学部以上かつ5名以上の学生が参画していること。

◎補助金

1プロジェクト当たり10万円～30万円程度,最高100万円(プロジェクト内容等による)

◎対象プロジェクト

- 文化の進展をはかるプロジェクト
- 持続可能な開発目標(SDGs)に取り組むプロジェクト
- 本学の発展に寄与するプロジェクト

◎募集開始

毎年度4月頃

◎問い合わせ先

日本大学本部学生部学生課
〒102-8275
東京都千代田区九段南4-8-24
TEL:03-5275-8124

このガイドブックの使い方

このガイドブックは、学生の皆さんの学修環境や学生生活の充実を目的に、主に新入生を対象にまとめた冊子です。

高校までの学び方は、決められた枠組みに沿って行われることが多かったと思います。しかし、大学での学修は、学生が主体的に自らの学修目的や考え方に従って、数多く設定されている科目の中から履修する科目を選択することが求められます。

大学での授業には、講義、演習、実験・実習・実技など様々な形態があり、試験は論述式筆記試験やレポートなどいろいろな形で行われます。特に、新入生の皆さんは、こうした高校との違いに戸惑いを感じるものが少なくないでしょう。

そのため、入学時には、オリエンテーションやガイダンスのほか、学生生活上の指導や履修に関する指導が行われますが、入学後にも、学修上のことで疑問を持つことがあるかもしれません。

そうしたときには、再び、このガイドブックを開いてください。きっと役に立つはずです。

表紙の“FD”って何？

FDは Faculty Development の略で、「教育内容・方法等をはじめとする研究や改善活動を大学全体として組織的に行うこと」を意味します。

具体的な取組としては、教員の研究能力や教育能力の開発、教育システムの開発（カリキュラム、授業評価などのしくみをつくること）、組織開発（教育研究組織などをベストな形にすること）が挙げられます。

日本大学では、FDを「自主創造の理念の下に日本大学を取り巻く外的諸要因をも分析して、学問領域単位（学科・専攻等）での教育プログラムを常に見直し、それを実行するため、教員と職員が協働し、学生の参画を得ながら組織的に取り組む諸活動」と定義しています。

FD活動を全学的に推進するため日本大学FD推進センターを設置し、様々な活動をしています。

CONTENTS

第1章

日本大学における学び 10

- 1 大学で学ぶということ 10
 - COLUMN 教養教育の重要性 14
- 2 日本大学で身に付ける力 15
 - COLUMN 日本大学の歴史 18 Message 日本大学における学修① 21
- 3 日本大学で学ぶということ 22
 - COLUMN オフィスアワー 24 COLUMN 学生の1週間の予定・アルバイト 25
 - Message 日本大学における学修② 26
- 4 日本大学を卒業した証し 27
 - COLUMN 就職に強い日本大学 28 Message 日本大学における学修③ 29

第2章

履修登録とシラバス 30

- 1 時間割と履修登録 30
 - COLUMN 学年制 30
- 2 シラバスの活用 31
- 3 履修登録トラブル集 33

第3章

授業の形態と受講 35

- 1 講義 35
 - Message 講義の受講スタイル 39
- 2 演習（ゼミナール） 40
 - Message ゼミの受講スタイル 42
- 3 実験・実習・実技 43
 - Message 実験・実習・実技の受講スタイル 46
- 4 論文・レポート 47
 - COLUMN 学びをサポートする大学図書館 50

第4章

成績評価 52

- 1 成績評価と単位 52
- 2 必要な学修時間 53
- 3 GPA制度 55
 - COLUMN GPA制度と単位の実質化 57
- 4 授業評価 58

第5章

快適な学修環境のために 59

- 1 日本大学の学修支援体制 59
- 2 キャンパス内マナー 60
- 3 人権侵害 61
- 4 社会的問題 63

日本大学における学び

1 大学で学ぶということ

》学ぶ主役は学生の皆さん

大学で学ぶには、教員の指導を受けるだけという受け身の姿勢ではいけません。学修^{*}の主体者である学生の皆さんが「自ら学ぶ」という積極的な意志を持つ必要があります。

社会的には、大学生になると、未成年であっても自己責任が問われます。授業では、高校時代のように固定したクラスではなく、履修科目により教室が変わります。一番変わるのは、学ぶ姿勢です。大学では、高校までの受動的学習から能動的学修へと変わります。また、初年次の学修への姿勢が今後の大学生活へ強く影響を与えます。

学生の皆さんには、「学修の主体は自分自身である」と強く認識することが求められます。

学修と学習

「学修」とは、大学で“学び”，教育課程を“修める”こと。学部等ごとに定められた「教育研究上の目的」を達成するために学ぶ行動を指す。知識や経験を蓄える「学習」とは区別して用いられる。



》大事な主体性と目的意識

あなたが日本大学に入学した目的は何でしょうか。自分自身の教養を高めたり、技能を身に付けたりするためではないでしょうか。学生生活で学び、修得したものを卒業後の生活に反映させ、充実した人生を送るとともに、そうした生き方を通して社会に貢献できる人間に育ってほしいというのが教職員の一致した願いです。

何のために大学に入学したのかをあらためて考えてください。何となく入学し、漫然と所定の修業年限*を過ごすのと、入学時から「自ら学ぶ」という主体性を持って学修するのとでは、卒業時における人間としての力が全く違うものになります。

大学に入学したことの意味を自分自身に問い、目的意識を持って、自分自身のために「自ら学ぶ」という強い自覚の下、学生生活を送ってください。

》批判的なものの見方

高校での授業は、先生に言われたとおりノートを取り、1つの答えを導き出すために、文法や方程式などを暗記するのが学びの主なスタイルでした。しかしながら、大学では、「答えのない問い」に対して考えを導き出さなければなりません。また、科学技術などは日進月歩で変容しています。今日、修得したことが、将来違った解釈に変わる可能性もあります。そうした大学での学びでは、批判的にものを見ることが重要です。批判的にものを見るとは、「非難する」のではなく、他者の意見がどのような事実に基づいているのかといった根拠を確かめて、多面的・客観的に理解し、自らの考えを吟味することです。それには、他者の意

修業年限

教育課程を修了するために必要な在学期間。在学することのできる「在学年数」とは異なる。

見に耳を傾けることが重要となります。さらに、そこで得た情報を自分なりに解釈して、自分自身の考えとして発信したり、議論したりすることが大学での学びでは必要になってきます。

こうしたことは、すぐに身に付くものではありません。大学での学修を通して、じっくり身に付けていくようにしましょう。

》大学のプログラムに参加

高等教育の先進国であるアメリカでは、「教育の質を保証しなければならないのは、当事者の大学である」という考えが生まれています。こうして、初年次教育*、インターンシップ*、サービスマーケティング*、キャリア教育*などきめ細かいプログラムが作られるようになりました。全ては学生の皆さんが、卒業後に成功を勝ち取るために考えられています。

これは日本でも同様です。初年次教育では、スタディスキルズ (p.23 参照) の修得、自らの意見を表現する方法などの指導があり、将来に向けたキャリア教育も熱心に展開されるようになりました。キャリア教育は、人生の進路・生き方を学ぶものです。それらは単一の科目やプログラムの受講で身に付くものではなく、大学での4年間の学びを通じて考えていくものです。

また、日本大学では、人生の進路を考えるという観点から、進路選択に関わる指導のほかに、業界セミナーや公務員対策講座など就職に直結する内容のプログラムを多くの学部で実施しています。このようなプログラムを生かし、学生自身が、それぞれの学修の場においてキャリア意識を高める努力をすることが大切です。

学生の皆さんは、目的意識を持ち、自身の特性や将

初年次教育

1年次生を対象に、レポート作成や資料収集など、大学における学修に必要な基本的な知識・技能・態度を伝える教育。

インターンシップ

企業実習。在学中に企業等で業務の実習を経験すること。希望する職業の内容を実際に理解し、学生と就業先との認識の相違を解消して、自らのキャリアを描けるという利点がある。

サービスマーケティング

学んだ知識や技能を地域貢献活動等に生かすことを通して、市民的責任や社会的役割を認識してもらうことを目的とした教育方法。

キャリア教育

学生一人ひとりのキャリア発達を支援し、それにふさわしいキャリアを形成していくために必要な能力や態度を育てる教育。大学は就職と直結するため、正課内教育のほか、各種の就職支援もキャリア教育の一環として実施されている。

来の方向を考えながら、大学の提供する授業以外のプログラムにも積極的に参加しましょう。何となく大学へ入学してきたと考えている人にとっても、将来、自分が進みたい方向を見つける絶好の機会になるでしょう。

》友人とのコミュニケーション

大学は、高校のように決まった場所で同一の学生と同じ講義を受講するわけではありません。必修科目以外は、自分が興味を持った科目を主体的に選びます。必修科目では、同じ学科等に所属する学生とともに受講しますが、総合教育科目などでは、自分とは異なる学科に所属する学生や、出身地の異なる学生と接する機会があり、多くの情報や気づきを得ることができます。日本大学のように多分野の学問領域があり、全国から学生の集まる大学では、コミュニケーションに磨きをかけることができるでしょう。自分の所属する学部・学科だけでなく、外に目を向けて多くの友人をつくり、学生生活を楽しむことが大切です。



教養教育の重要性

教養教育と自主創造

大学4年間（短大は2年間、医療系は6年間）の教育は、「学士課程教育」と呼ばれ、一般的に教養教育と専門教育に分けられていました。

しかし、近年の教育カリキュラムの改変により、多くの学部で教養教育と専門教育が融合した形態をとるようになりました。例えば、医学部では、1年次に語学などの教養科目と専門科目が融合したカリキュラムとして、英語による「医学英語」が開講されています。

それでは、「教養」とは何でしょうか。中学や高校在学年齢に相当する青年期は、自己を確立し、成人となる基礎を培う重要な時期です。そのため、中学・高校における教養教育は、自己の確立と、成人へとつなげるための教育中心で、比較的一律に行われてきました。

平成22（2010）年の日本学術会議では、21世紀に期待される教養を「現代世界が経験している諸変化の特性を理解し、突きつけられている問題や課題について考え探究し、それらの問題や課題の解明・解決に取り組んでいくことの出来る『知性・智恵・実践的能力』

である」と述べています（21世紀の教養と教養教育）。

この考えは、まさに日本大学の教育理念である『自主創造』の考えに含まれる内容です。本学での自主創造の教育理念を完遂できれば、本世紀に期待される教養を身につけることが可能だと思えます。

豊かな教養は社会のニーズ

現代社会は、総合的な教養力を身につけた人材を必要としています。これは、現代社会のますますのグローバル化と、アメリカなどでのリベラル・アーツ^{*}の考えによるものと考えます。大学教育は教養と専門の二者から構成され、近年、特に教養教育の重要性が強調されています。当然、総合的な教養力は、就職でも重要なポイントとなっています。

日本大学に入学した皆さんは、日本大学で身につけた総合的な教養力と専門教育を融合させ、これからの日本そして世界へ羽ばたくことを目指し、日々学修しましょう。（全学FD委員会教育情報マネジメントワーキンググループ）

*専門職業教育としての技術の修得とは異なり、思考力・判断力のための一般的知識の提供や知的能力を発展させることを目標とする教育。

2 日本大学で身に付ける力

》日本大学の「目的及び使命」

日本大学は、「日本大学学則」(第1章第1節)に「目的及び使命」を、次のとおり明示しています。

「日本大学は、日本精神にもとづき、道統をたつとび、憲章にしたがい、自主創造の気風をやしない、文化の進展をはかり、世界の平和と人類の福祉とに寄与することを目的とする。

日本大学は、広く知識を世界にもとめて、深遠な学術を研究し、心身ともに健全な文化人を育成することを使命とする。」

この「目的及び使命」は、時代の推移に即応して数回の改訂を経ていますが、その淵源は、明治22(1889)年に創立された本学の前身である日本法律学校の設立主意書に求めることができます。

》日本大学の教育理念「自主創造」

平成19(2007)年度には、本学の教育理念を「自主創造」と決めました。

“自主創造”とは何かをまず考えてみましょう。そして学年が上がったら、また考え直してください。きっと社会に出てからも、この“自主創造”の理念が人生の礎となってくれることと思います。

「自主創造」を理念としたのは、学則の「目的及び使命」にうたわれていることに加え、「自主創造」の気風に満ちた人材の養成が今まさに社会で求められているからです。21世紀が知の世紀と強調され、その知は「積極的な知」、つまり、「自主創造の知」であり、

国際化に対応できる人材の特性が「自主創造」であることによります。本学でそれぞれが学ぶ領域や活動体験を生かし、「自主創造」のできる人間の養成を目指します。

》日本大学教育憲章

平成 29 (2017) 年 4 月 1 日に「日本大学教育憲章」が施行されました。「日本大学教育憲章」は、「目的及び使命」に示されている内容を教育に特化し、今日の時代に見合った、学生が修得すべきマインドや能力として具体的にまとめたものです。教育理念である「自主創造」の気風のもと、それらの能力を「日本大学マインド」として明示し、学生をはじめとする学内外の関係者にわかりやすく表現しました。これにより、16 学部等を有する日本大学の多様なカリキュラムがより強く体系付けられ、本学の学生が一定の共通した能力を備えて学位を取得し、卒業することにつながっていきます。

なお、各部科校⁺では、本学の「目的及び使命」「教育理念」に基づき、「日本大学教育憲章」の内容を踏まえながら、それぞれ独自の教育に関する方針を策定しています。所属する学部等のホームページなどを確認してください。

部科校

日本大学が設置する大学院・学部・通信教育部・短期大学部・高等学校・中学校・小学校・幼稚園・認定こども園および専修学校を総称した呼称。

■日本大学教育憲章 概念図

日本大学マインド

◆日本の特質を理解し伝える力

日本文化に基づく日本人の気質、感性及び価値観を身につけ、その特質を自ら発信することができる

◆多様な価値を受容し、自己の立場・役割を認識する力

異文化及び異分野の多様な価値を受容し、地域社会、日本及び世界の中での自己の立ち位置や役割を認識し、説明することができる

◆社会に貢献する姿勢

社会に貢献する姿勢を維持することができる

自主創造

自ら学ぶ

◆豊かな知識・教養に基づく高い倫理観

豊かな知識・教養を基に倫理観を高めることができる

◆世界の現状を理解し、説明する力

世界情勢を理解し、国際社会が直面している問題を説明することができる

自ら考える

◆論理的・批判的思考力

得られる情報を基に論理的な思考、批判的な思考をすることができる

◆問題発見・解決力

事象を注意深く観察して問題を発見し、解決策を提案することができる

自ら道をひらく

◆挑戦力

あきらめない気持ちで新しいことに果敢に挑戦することができる

◆コミュニケーション力

他者の意見を聴いて理解し、自分の考えを伝えることができる

◆リーダーシップ・協働力

集団のなかで連携しながら、協働者の力を引き出し、その活躍を支援することができる

◆省察力

謙虚に自己を見つめ、振り返りを通じて自己を高めることができる

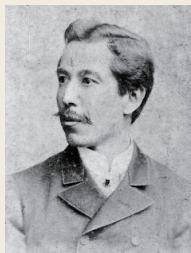
日本法律学校として設立

日本大学の前身である日本法律学校は、明治22（1889）年10月4日に創立されました。大日本帝国憲法が公布され、また欧米の近代法を取り入れた刑法・民法・商法などの諸法典も整備されつつある時期でした。

司法大臣の山田顕義^{みきよし}は、それまでの欧米諸国の法律を学ぶことが主流の法学教育に疑問を持ち、日本の伝統・慣習・文化を踏まえた日本の法律を教育する学校構想を抱いていました。

同時期、宮崎道三郎・金子堅太郎などの若き法律学者たちも、日本法学教育の必要性を認識し、山田とは別に日本法律学校設立構想を進めていました。同様の構想を進めていることを知った山田は、宮崎らを全面的に支援し、日本法律学校は創立されました。

現在、日本大学では、創立に関わった法律学者など11名を創立者とし、彼らを全面的に支援した山田顕義を学祖として顕彰しています。



設立者総代
宮崎 道三郎



初代校長
金子 堅太郎



学祖 山田顕義

学祖 山田顕義の活躍

山田顕義は、弘化元（1844）年、長門国萩（現山口県萩市）で、山田顕行の長男として誕生しました。吉田松陰の松下村塾に入門し、幕末から明治初年にかけては、軍人としての才能を発揮します。特に戊辰戦争では、新政府軍を率いて、東北諸藩および箱館五稜郭の旧幕府軍平定に功績を挙げました。

明治4（1871）年、岩倉使節団に理事官として随行し、欧米諸国の軍事制度を調査研究します。

帰国後は、司法省に勤務して近代法整備に尽力しました。その後、参議兼工部卿、内務卿、司法卿を歴任し、明治18（1885）年、内閣制度発足に伴い、初代司法大臣に就任しました。

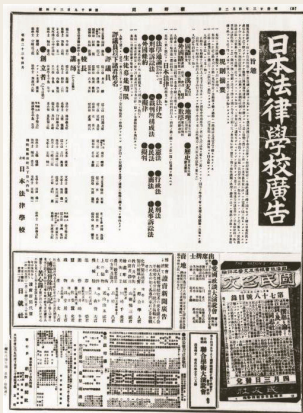
教育面では、明治22（1889）年には皇典講究所所長に就任し、同所内に日本法律学校を創立しました。

明治25（1892）年11月、山口亀山における旧藩主毛利敬親等銅像起工式出席の帰路、生野銀山（現兵庫県朝来市生野町）を視察中、49歳で急逝しました。

創立の目的

日本法律学校の創立目的は「日本法律学校設立主意書」に記されています。これを要約すると、(1)日本の法律は新旧を問わず学ぶ、(2)海外の法律を参考として長所を取り入れる、(3)日本法学という学問を提唱するという3点です。

欧米法教育が主流な時代にあって、日本の法律を教育する学校の誕生は、大いに独自性を発揮することとなりました。



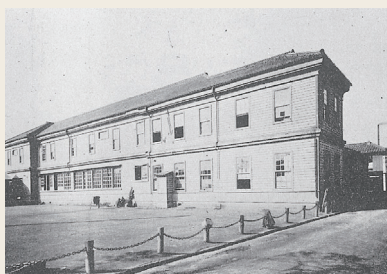
日本法律学校広告

千代田区に校舎建設

日本法律学校開校当初は、飯田町（現東京都千代田区飯田橋）にあった皇典講究所の一室を借りて授業が開始されました。明治23（1890）年には國學院（現國學院大學）も同所に創立され

たため、昼は國學院、夜は日本法律学校が同じ場所で授業を行いました。

明治29（1896）年、日本法律学校は神田区三崎町（現千代田区三崎町）に初の独立校舎を取得しました。これが現在の法学部本館のある場所です。



明治期の校舎

日本法律学校から日本大学へ

明治36（1903）年、日本法律学校は、校名を日本大学として大学組織に改め、翌37（1904）年、専門学校令による認可を受けました。

大正9（1920）年、大学令による大学となり、本学は総合大学への道を歩むこととなります。

大正12（1923）年の関東大震災では全施設が壊滅的な被害を受けましたが、全学一丸となって復興を成し遂げ、人文・社会・芸術・自然・医歯系の広範囲に及ぶ教育組織を整備しました。（企画広報部広報課）

年表

明治22(1889)年	10月	日本法律学校創立
明治26(1893)年	7月	第1回卒業式を挙行
	12月	校友会を結成
明治31(1898)年	3月	高等専攻科を設置し、卒業生に日本法律学士の称号を授与
明治34(1901)年	10月	高等師範科(現文理学部)設置
明治36(1903)年	8月	日本法律学校の組織を改正し、校名を日本大学とする
明治37(1904)年	3月	専門学校令による大学となる
	3月	商科(現経済学部ならびに商学部)設置
明治39(1906)年	8月	初の留学生を欧州に送る
大正3(1914)年	4月	「建学の主旨及綱領」を制定
大正9(1920)年	4月	大学令による大学となる
	4月	初めて女子入学を許可
	5月	校歌を制定
	6月	高等工学校(現理工学部)設置
大正10(1921)年	3月	法文学部に美学科(現芸術学部)設置
	4月	東洋歯科医学専門学校(大正5年創立)を合併(現歯学部)
	9月	大学色を「紅」に決定
大正11(1922)年	10月	日大新聞(現日本大学新聞)創刊
	3月	大学旗を作製
大正14(1925)年	3月	専門部医学科(現医学部)設置
	3月	大阪に日本大学専門学校(現近畿大学)設置
昭和4(1929)年	5月	新校歌を制定(現校歌)
昭和10(1935)年	10月	日本大学本部・図書館竣工
昭和13(1938)年	10月	創立50年記念式典挙行
昭和18(1943)年	5月	農学部(現生物資源科学部)設置
昭和22(1947)年	3月	専門部工科(現工学部)を福島県郡山市に移転
昭和23(1948)年	11月	通信教育部設置
昭和24(1949)年	4月	新学制による大学となる
昭和25(1950)年	4月	短期大学(現短期大学部)設置
昭和27(1952)年	2月	工業経営学科(現生産工学部)、薬学科(現薬学部)設置
昭和33(1958)年	6月	日本大学講堂設置
昭和34(1959)年	9月	「目的および使命」を改訂
	10月	創立70周年記念式典挙行
昭和46(1971)年	4月	松戸歯科大学(現松戸歯学部)設置
昭和54(1979)年	4月	国際関係学部設置
昭和57(1982)年	7月	日本大学会館設置
平成元(1989)年	10月	創立100周年記念式典挙行
平成6(1994)年	10月	総合学術情報センター設置
平成19(2007)年	6月	教育理念を「自主創造」と決定
平成22(2010)年	6月	桜門会館設置
平成28(2016)年	4月	危機管理学部、スポーツ科学部設置
	12月	「日本大学教育憲章」を制定(平成29年4月施行)

Message

日本大学における学修①

主体的に問題解決する力を鍛えよう

医学部 教授 木下 浩作



大学では、主体的な学修が求められています。そうした学びを進める上で大切なことが3つあります。

1つ目は、目的意識を持つことです。これから、授業、試験やレポート、卒業論文など数々のステップがありますが、入学したことだけで満足していると、乗り越えることができません。「こんな知識を付けたい」など、今はまだ漠然としたものでもいいので、“何のために学ぶのか”という“軸”を持つことが大切です。

2つ目は、知識を活用する力です。教科書で学んだ知識をただ覚えるだけでなく、それを社会でどのように活用していくのか意識しながら学ぶことが重要です。また知識を深めるため、学んだことと関連する領域も積極的に学びましょう。

本学では、実践の場で活用できる“使える知識”にするために、対話型の授業を多く展開しています。例えば医学部では、3年次から問題基盤型学修（写真）を行っています。提示された症例に関して、5～6名程度のグループディスカッションを行い、学生だけで治療法などを考える授業です。問題解決に向かって自ら考え、仲間と共に答えを導くという経験を重ね、知識の活用の仕方を身に付けています。

そして3つ目は、コミュニケーション力です。社会に出たとき、多くの仕事はチームで行われます。そこでは、周囲の意見や考えを吸い上げ、協力しながらプロジェクトを進める能力が求められます。人と話すことが苦手だからといって放っておかず、訓練していきましょう。

1年次からそうした力を鍛えるために、本学では全学共通初年次教育科目「自主創造の基礎2」を設置しています。大学生として能動的な学修法を学ぶほか、他学部の学生とディスカッションを行う「日本大学ワールド・カフェ」の実施を含んだ科目です。「日本大学ワールド・カフェ」では様々な学部・学科の学生が混在するグループに分かれ、一つのテーマについて語り合います。こうした機会も活用し、人前で話す力、仲間の意見を聞く力を鍛え新しい価値観や考えに触れ、視野を広げてほしいと考えています。



提示された症例に関して6名程度でグループディスカッションし、学生自ら問題点・解決法を考えていく。

3 日本大学で学ぶということ

》自ら考え、判断する力

大学では、専門教育科目だけでなく、知識人として必要な一般教育科目や総合教育科目を広く学びます。また、大学での学びは、教員の講義や教科書・参考書の内容を正しく理解することにとどまりません。むしろ、**自らが考え、判断する力を養う**ことが大切です。高校までは、ともすると受け身の学習姿勢が主でしたが、大学では主体的に学ぶ積極性が特に求められます。

大学では、学年を追うごとに専門教育科目が増え、それに伴って、より多くの知識が必要となります。そのため、本格的な専門教育科目を学修する準備段階として、なるべく早期に、できれば初年次修了時まで**基礎学力を身に付ける**ことが必要です。

さらに、国内はもとより諸外国で、より良い人間関係を築くためには、日本語・外国語の語学力が不可欠であり、コミュニケーション力を身に付けなければいけません。それらを学ぶことが、人間性の向上にも深く関わっているからです。



外国人留学生と交流する日本人学生。

ゼミの授業風景。自分自身で考えることが大事。



》多種多様な人とのつながり

大学で学ぶ意義の一つが、多様な価値観や個性を持つ人々との交流です。日本大学には外国人留学生を含め、様々な国や地域から、多彩な個性を持つ学生や教員が集まっています。同じ学部やキャンパス以外にも、P.5でも紹介した「日本大学ワールド・カフェ」や「大学生サミット（NU祭実行委員会）」など、全学的な交流機会を設けています。広い環境と様々な人々と刺激しあう中で、多様な視点や柔軟な発想力を培ってほしいと願っています。

教員の研究分野も多様です。大学では、通常、2年次以降にゼミナールや研究室に所属し、1人の指導教員の下で自らの専門分野について学修する形式が主流です。しかし、専門分野を学ぶうちに、その周辺分野の学びも必要になってきます。その際は、指導教員に相談し、助言してもらえる教員が自分が所属する学部内だけでなく他学部にもいないか調べてみましょう。そのような教員がいたら、アポイントメントをとって訪問し、直接意見を伺うことも大切です。

卒業生数日本一の日本大学は、社会のどの分野においても卒業生と出会うことができます。就職活動の一環で行うOB・OG訪問では、日本大学の規模とその利点を最大限に感じる事ができるはずです。社会に出てからも、その有用性を感じることでしょう。

》学びをサポートする種々のしくみ

日本大学は、学生の学びをサポートする種々の体制を整備しています。初年次には、リメディアル教育科目^{*}、スタディスキルズ^{*}等、大学における学修への橋渡しとなる科目を設置しています。また、日本大学の

リメディアル教育科目
補習教育科目。大学教育を受けるために必要となる基礎的な知識を学ぶ。

スタディスキルズ
ノートの取り方、レポートの書き方、資料の探し方など、大学での学びに必要な学習方法や、専攻分野特有の専門的な学習技術を身に付ける科目。ウォーミングアップ学習として位置付けられる。

他学部・学科の授業を受講できる「相互履修制度」があります。卒業までの履修計画の中で、自身の専門以外に興味のある科目を受講してみてもよいでしょう。

それとは別に、学部等によっては学習支援センターなどを設け、基礎学力の向上を積極的にバックアップしています。また、学生相談室には、インテーカー^{*}や相談員が随時待機していて、学生生活全般について相談ができます。さらに、オフィスアワー^{*}では、各教員が担当する科目の質問や種々の相談に応じています。

自分の第一希望だった学科に入学できなかつたり、在学中に自分の専門に興味を失ったりしてしまう学生もいるでしょう。大学生生活全般で少しでも不安に感じていたり、違う勉強をしてみたいと感じるようになったら、教務課や教員に相談してください。

日本大学の学生であることを自覚するとともに、これらのサポートを有効に活用し、より充実した学生生活を送ってください。

インテーカー

受理面接者。依頼者によって内容を把握し、最適な相談者や機関を紹介する。聴く技術、把握する知識があり、良い関係づくりができる人。

オフィスアワー

下のコラム参照。

COLUMN

オフィスアワー

オフィスアワーは、学生の皆さんが教員に聞いてみたいことや、相談したいことがあった場合、**直接、教員と話ができる時間**です。基本的に、疑問点などがあればいつでも教員を訪ねてよいのですが、教員も授業のほかには会議などで、研究室に不在で対応できないこともあります。あらかじめ設定されているオフィスアワーを利用すれば、こうした問題は解消されます。

学生の皆さんは、シラバスなどに記載されている各教員のオフィスアワー

の時間と場所を調べ、気軽に教員を訪ねてみてください。授業や事前学習の疑問点解消のため、積極的に活用するとよいでしょう。



オフィスアワーに先生の研究室を訪れ、相談する学生。

学生の1週間の予定・アルバイト

授業時間数と同じだけの 学習時間を確保

教員が新入生に伝えたいことは数多くあります。専門性を身に付けるとともに、それを獲得する上でも重要なアカデミック・スキルズ*を習得することが代表的な例です。ただ、まず初めに考えてほしいのは、大学生活に多くの期待を抱いている今だからこそ、近い将来、あるいは遠い将来に向けてやりたいことを明確にして、卒業までの計画を立て、それを踏まえた1週間の計画を練ることです。その際、少なくとも次の点に留意してください。

履修科目が決まると、その前後の空き時間や授業のない曜日などが見えてきます。例えば、年間40単位履修登録するとして、半期で20単位10科目、仮に1限目から5限目まで授業を詰め込めば、2日間で必要な科目数を履修することも可能です。「時間が空いているからアルバイトでも入れよう」と考えているのなら、大学の単位修得を少々軽く見ているのか、既に大学での目標を見失っているのかもしれない。

大学における単位修得の前提は、授業への出席はもちろん、その前後の自習（予習・復習）も含まれています。まずは、授業時間数と同じだけ（できればそれ以上）の学習時間を確保してください。科目によって必要な学習時間に差があります。少なくとも5月、

できれば前期終了までは、自分の力量を測る期間として、空き時間の使い道を見極めましょう。単位修得だけを目指とするのではなく、理解の水準や専門性の到達目標を高く設定していれば、それほど空き時間は作れないはずです。

学業を優先した アルバイトの設定

仕送り額がどちらかといえば低い方だった筆者は、生活費を補うためにアルバイトをしていました。周りの友人と同じように、親睦会や部活動の合宿に参加しようと思うと、アルバイトの量が必然的に増えました。日中は授業があるので、夕方から夜にアルバイトをしていましたが、週4日入っていたころは、1限目の授業にあまり出席できませんでした。しかも、突然、追加を頼まれることもあり、実際には週4日以上時間をアルバイトに費やしていました。当時の自分は強い意志で断ることもできなかったのです。

最終的に、アルバイトは週2日程度に抑えることにし、お金の掛かる大学生活は諦めました。時間を自分のために「投資」できる生活に変えたわけです。「あきらめる」を「明らかに極める」の意味ととらえれば、案外、大学生活で「あきらめる」ことも重要なかもしれません。

（全学FD委員会教育情報マネジメントワーキンググループ）

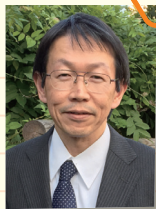
*大学で学ぶための基本的な方法・技術。例えば、レポートの書き方や情報収集のしかたなど。

Message

日本大学における学修②

先生の話をしっかり聴こう

工学部 教授 石川 博康



授業中、先生の板書をノートに書き写すだけで大丈夫と安心していません。高校までの学習はそれで十分対応できたかもしれませんが、大学では、先生が話す内容のほうが重要なことがよくあります。先生が「ここが大切です」「この内容は2年生の〇〇で使います」などと説明する場合は、学生にぜひ覚えてほしいからです。それらをきちんと押さえているかどうかで、理解度に差がつきます。

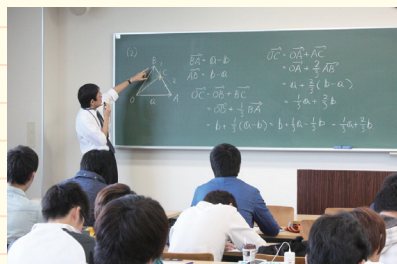
先生の話に耳をしっかり傾け、重要事項をつかんでノートに書く練習を1年次から積んでください。先生の話そのまま書きとめるのではなく、聴いた内容を自分の言葉に置き換えるのがポイントです。最初は話に追いつけなくても、諦めずに続けていくうちに、要点が頭に入ってくるようになるでしょう。

私の授業では、学生が板書をノートに写す時間を確保し、説明する時間と分けています。また、ほかの科目に関連する事項は、明確に伝えるようにしています。特に、専門科目はそれぞれが独立した学びではなく、すべてが関連しているからです。そうした関連性をノートに記録しておき、進級時にはそれを見直して復習し、次の学びに生かしましょう。

学びを深めるためには、友達の存在も

大切です。同じ学部・学科の学生は、これから同じ学問を学び、切磋琢磨していく仲間です。先生に質問するのは気後れしても、友達になら気軽に聞けるでしょう。友達でも分からなければ、その人の友達に聞く。そのようにして3人、4人、5人と友達を増やしていくとよいと思います。

例えば、私が担当する「電磁気学」では小テストを半期に5回行いますが、テスト前には学生が自主的に集まり、勉強会を開いているそうです。再履修者が多い科目ですが、友達同士で頑張っている学生のほうが成績が良い傾向にあります。質問する側が疑問を解決できるだけでなく、教える側も相手がわかるように説明することによって理解がさらに深まるからでしょう。学び合いは、学修の質を高めるために有効な方法です。



重要事項は色付きのチョークで書き加える先生もいる。もらさず書き取る。

4 日本大学を卒業した証し

》学位の授与

学位とは、大学を卒業した人や大学院の課程を修了した人に対して授与される称号です。学部等によって定められたディプロマ・ポリシー*の下、修業年限に達し、所定の授業科目および単位を修得して卒業した学生に「学士」（学部）、「短期大学士」（短期大学部）の学位が授与されます。

学位は、「学士（〇〇〇）」のように表記され、（〇〇〇）の箇所には専攻分野の名称が入ります。例えば、法学部を卒業すると「学士（法学）」となります。

卒業と同時に学位を授与する大学では、いわゆる“卒業証書”のことを「学位記」といいます。日本大学では、日本大学全体で行う卒業式とは別に学部等ごとに学位記授与式を行って、卒業生に「学位記」を授与します。

このように、学位は、学部等ごとに定めた「教育研究上の目的」の下、本学で特定の専門分野を学修し、一定の教育課程を修めた証しとなるものです。

》さらに専門分野を追究

学部で専門科目を勉強し、さらに専門分野の知識を深化させて社会に出たいと感じたり、研究者を目指したいと思ったら、大学院という進路があります。

大学院では、修士（大学院博士前期課程〔修士課程〕）、博士（大学院博士後期課程〔博士課程〕）、あるいは専門職（大学院専門職学位課程）の学位取得に向けて、学修・研究することになります。修士以上の学位は、一定の専門性を有する人材としての称号だといえます。

ディプロマ・ポリシー
卒業認定・学位授与に
関する基本的な方針。

就職に強い日本大学

卒業後の自分を思い浮かべたことがありますか。

日本大学は約 116 万人の卒業生を有し、数々の先輩方が社会で活躍しています。その証しとして日本大学出身の社長の数は 2 万人を超え、30 年連続で日本一を誇ります。

だからといって「自分も簡単に就職できる」と安心してはいけません。大学での学びをスタートさせる前に、自分が「将来、何をしたいのか」「何になりたいのか」をイメージすることが重要です。そして、そのイメージに少しでも近づけるよう自分自身を磨いてください。自分自身で考え、動くことができる人間こそ、社会で求められている人材だからです。

実際、就職活動の面接では、自己 P R や志望動機はもちろん、大学時代に何をしていたのか、大学で自分をどのように磨き、そして社会でどのように役立つことができる人間なのかを問われます。つまり、学生生活を充実させることが重要なのです。

そして、その経験を自慢できるくらい語れば、自ずとゴールは見てくるはずです。まずは将来のための自分づくりに積極的に励み、様々なことにチャレンジして、多くの貴重な経験をしてください。

日本大学では、学生のキャリア・就職について万全の体制で支援すべく、全学的、そして学部ごとに数多くのプ

ログラムを用意しています。例えば、全学的な支援として全学生が利用できる「NU 就職ナビ」には、毎年 1 万件にも及ぶ企業からの求人情報や、16 万件的企業情報、OB・OGの有無、先輩たちの就職活動報告など、就職活動に役立つ情報が掲載されています。

また、最近では、インターンシップに参加する学生が増えています。3 年生を対象にしたものが多いのですが、低学年向けのインターンシップも増加しています。積極的に参加して、社会や企業がどんなところなのか、働くとはどういうことか肌で感じてください。

この他にも公務員対策講座等、様々な支援を行っていますので、各学部の就職コーナーや「NU 就職ナビ」を利用する等、自分の希望する未来のために日々研鑽しましょう。

(学生部就職課)

求人数件数：13,766 件

産業分類	産業別求人状況
農業	0.4%
林業	
漁業	0.1%
鉱業	
建設業	11.9%
製造業	19.0%
電気・ガス・熱供給・水道業	0.3%
情報通信業	14.4%
運輸業	2.3%
卸・小売業	17.6%
金融・保険業	2.5%
不動産業	1.8%
飲食店・宿泊業	1.6%
医療・福祉	6.8%
教育・学習支援業	2.2%
複合サービス事業	0.8%
サービス業	18.3%

※平成 29 (2017) 年度

Message

日本大学における学修③

日々の講義で振り返りをしよう

経済学部 准教授 大槻 明



大学では、履修科目は好きに選ぶことが多く、時間割を自分で決められます。そして、自由な環境だからこそ、主体性が求められます。受け身の姿勢では、専門性が高く、進度も速い大学の授業にはついていけないでしょう。その結果、学修意欲を失いかねません。

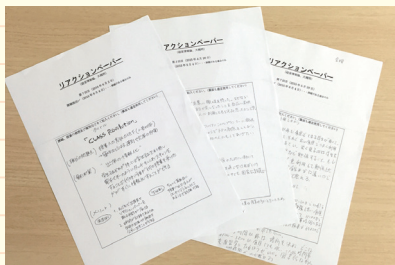
私は、学生が主体的に学べるようになってほしいと、講義にアクティブ・ラーニングを取り入れています。具体的には、授業で学んだことを学生自らの言葉で、リアクションペーパーにアウトプットするという振り返りの時間を設けています。このことにより、学んだことがより脳に定着すると期待されます。また、講義内容を整理する時に、講義中には気づかなかった発見があるかもしれません。

アクティブ・ラーニングは、学修者が能動的に授業に参加する学び方です。授業の振り返りは、1人で手軽にできるので、ぜひ試してみてください。知識の定着にも役立つはずですが、少しの工夫で学びが豊かになることを実感すれば、主体的な気持ちも生まれます。

早い段階で（1年生のうちに）大学卒業後の展望を描くことも、学習意欲を高めるのに役立つと考えられます。目の前の学問と社会とのつながりが見えやすく

なることにより、自分が何のために学ぶのが明確になり、授業への意欲も向上することが期待できるからです。

そこでお勧めしたいのが、在学中に、卒業後の世界により多く触れることです。本学ではキャリア講演会などのさまざまなイベントが実施されています。また、私が担当する1年次の必修科目「基礎ゼミ」では、卒業生を講師に招き、大学在学中にどのような目的で何を学んだかといったことを語ってもらっています。また、学部の授業でも、IT企業の方によるケーススタディ講演会を実施し、実際にどのような仕事をされているのか、といったことについても話してもらっています。有識者の講演は、どの学部でも行っているのです。積極的に参加してください。自分の学部・学科の卒業生を訪問してもよいでしょう。



授業で学んだことを自らの言葉で振り返るための「リアクションペーパー」。この様式でなく、ノートに書いてもよい。

履修登録とシラバス

1 時間割と履修登録

》履修のチェックポイント

年度（学期）の初めには、各学部で定められた方法に従って、履修する科目を選択・確認し、登録します。この履修登録は、所定の期間内に済ませなければいけません。方法は学部等によって異なりますが、ウェブによる登録が多くなっています。

授業科目は、教育活動の成果として保証するディプロマ・ポリシーを踏まえ、体系的に設けられています。その教育内容ならびに学修・教育方法全体（教育課程）がカリキュラムです。

カリキュラムの中心をなすのが、卒業までに必ず修得しなければならない必修科目であり、それぞれの学

COLUMN

学年制

「学年制」とは、各学年での教育課程を修了し、進級・卒業する「学年進級制」を採用の方式のことです。学年によって定められた科目の単位を修得し進級判定されなければ、進級できません。

「学年進級制」は、卒業時に国家試験に合格し国家資格を取得する必要のあ

る医・歯・薬系の学部・学科が採用しており、日本大学では、医学部、歯学部、松戸歯学部、生物資源科学部（獣医学科）および薬学部が、この方式を採用しています。

なお、詳細については、各学部の『学修要項』等を参照してください。

科や専攻の核となる科目です。必修科目以外には、選択必修科目、選択科目などがあり、様々な分野の科目が設けられています。年度ごとに、どの科目をどのように履修するかは、一定の要件の下、個々の学生の自主的な判断に基づいて決められます。

選択必修科目や選択科目は、多様な学問の方向性に対応できるように工夫されています。自分自身で勉学の目的・方向を定め、それに応じて時間割を組み立てましょう。必修科目、選択必修科目（および段階制科目）、選択科目は、それぞれが所属する学科、コース、または自分自身の学修目的などに応じて履修登録することが望ましく、そのために、次の点に注意してください。

- (1) シラバスで授業科目の概要を理解する。
- (2) 必修科目は定められた履修年次に必ず履修する。
- (3) 学科別専門教育科目と他の科目（一般教育科目・総合教育科目、外国語科目、保健体育科目、共通選択科目等）のバランスをとる。
- (4) 科目数および曜日・時限を適切に配分し、学修に無理を来さない。

2 シラバスの活用

》シラバスは授業の羅針盤

シラバス (Syllabus) は、授業概要や授業計画を示す、いわば授業の羅針盤です。担当教員によって作成され、学部のホームページなどで公表されています。授業の概要を理解するためのもので、学生の皆さんの学修を成功に導く役割を果たすため、必ず目を通しておきましょう。

まず自分が受講したい授業のシラバスを探します。授業科目名と教員名を確認することが第一歩です。授業のテーマ、目的・到達目標を見ると、何をどこまで学ぶのかがわかります。

授業方法は、講義、演習、実習・実験・実技など多彩です。履修要件などがあれば、それをクリアしているかどうか確認しておく必要があります。各週の「予習」と「復習」についての具体的な指示も書かれています。授業は、予習・復習と講義への出席から成り立っています。教科書の指定があれば授業初日までには準備しておきましょう。参考書などは、図書館を利用することが賢明です。

シラバスは学期ごとに書かれ、多くは1学期で15週の授業計画が示されています。教科書を使う授業であれば、おおむね教科書の目次に沿って進むでしょう。

学生にとって、成績の評価方法や評価基準の欄は大いに気になるところです。試験が重視されるのか、レポートや授業中における発表、発言が評価されるかなどを確認してください。シラバスは、コピーしてノートの最初のページに貼ったり、携帯端末に取り込んだりしておき、時々参照するように心掛けましょう。

シラバスの具体的な内容は、学部等によって異なります。ポイントを十分理解し、本当に自分が受講したい授業を履修できるようにシラバスを有効活用しましょう。

■シラバス記載項目

1. 科目の基本情報

- 1-1 授業科目名
- 1-2 担当教員名
- 1-3 開講学科・コース（必要に応じて記載）
- 1-4 対象学年・履修条件
- 1-5 期間（前期・後期・通年）
- 1-6 単位数
- 1-7 必修・選択の別

2. 授業内容

- 2-1 授業の概要
- 2-2 授業の目的・到達目標
- 2-3 授業の方法
- 2-4 準備学習・授業時間外の学習
- 2-5 授業計画（半期15週それぞれの内容）
- 2-6 成績評価の方法及び基準

3. 教科書等

- 3-1 教科書
- 3-2 参考書（参考ホームページも含む）
- 3-3 連絡先（オフィスアワー， e-mailなど）
- 3-4 その他（履修上の注意， 受講生に対する要望， TA・SAの有無など）

3 履修登録トラブル集

》登録ミスのないように確認

学期が始まる前に、シラバスに目を通しておきましょう。学部・学科のガイダンスなどに参加して履修科目が決まったら、決められた期間に履修登録します。履修登録が完了すると、あなたの名前が記載された履修者名簿が担当教員の手元に渡り、それをもとに出席確認がなされます。

希望科目の履修登録を失敗してしまうと、授業に全て出席して試験を受けたとしても、単位を修得できなくなります。大学は、履修登録期間のほかに履修登録内容確認期間を設けるなどして、履修登録でミスしないように配慮しています。やむを得ない理由により、所定の期間に履修登録ができなかったり、確認できなかったりする場合は、早めに教務課に相談しましょう。

学部や学科によっては学期中に修得できる受講単位数の上限を設けている場合もあります。学年や学科・コースの配当、先修条件*など、履修に当たってのルールが設けられています。学年が上がるほどケアレスミスが多くなる傾向がありますので、友人と互いに照合しながら進め、疑問点があれば必ず教務課で確認することが大切です。

先修条件

体系的な学修のための条件。例えば、上級学年のより専門的な配当科目を履修する場合に、その基礎となる教養的な科目を下級学年で履修することで、当該科目の学修を効果的に深く行うことができる。



授業の形態と受講

1 講義

》講義に取り組む姿勢

高校までの学習は、教科書の内容や教員の説明を正しく理解し、記憶することが中心であり、これは学習上、大切なことです。しかし、大学での学修は、それにとどまりません。講義では、教員が自らの研究を基礎として、様々な前提や立場から専門的な理論や学説を論述していきます。そのため、講義には担当教員の考え方、見方が大きく反映されるのです。

従って、受講する学生も講義内容をしっかりと把握する一方で、真意をよく理解せず受け入れるのではなく、その論理や論旨の妥当性について自分なりに考え、検証していくことが求められます。こうした学びの姿勢が、やがて自らの頭で考え、自らの言葉で発言し、自らが物事を判断していく能力を養うことにつながります。これも大学の講義の大切な目的といえます。

講義の様子。



》様々な講義形態

講義の進め方は十人十色、教員によって実に様々です。例えば、黒板にひたすら板書をする教員もいますし、レジュメ*を配布して板書をほとんどしない教員もいます。板書とレジュメの両方を活用する教員もいます。また、最近では、スライドを利用して授業をする教員が増えてきました。プロジェクタを用いてインターネット画面を映すこともあります。このような視聴覚教材を使って学ぶと、講義が一層理解しやすくなります。

まずは、授業をする教員がどのようなタイプなのかを理解して、授業の受け方やノートの取り方を工夫する必要があるでしょう。

》欠席は命取り!?

講義科目に限らず、演習科目や実験・実習・実技科目でも「出席する」ことは前提条件です。高校の授業と違い、教員が教科書どおりに授業を進めるとは限りません。教科書から外れた寄り道の話が、実は重要であることもあります。授業を休んでしまうと、その授業は聞けません。

また、教員は教える講義の内容を15週のストーリーとして考えています。テレビドラマを1週見逃すと、大筋は理解できても細部の理解はできなくなってしまうのと同じように、授業の内容も十分な理解ができなくなってしまうます。

また、授業に主体的に取り組む上での最も基本的な姿勢として、授業開始時刻に遅刻しないように努めましょう。授業の途中から出席すると、教員や他の学生に迷惑がかかるばかりか、欠席したのと同じように十

レジュメ

レジメともいう。摘要のこと。研究報告などで、その内容を手短かにまとめて示したもの。

分な学修効果が見込めなくなってしまう。

》ノートの取り方

講義の進め方は、教員によって異なります。授業はシラバスに従って進められることが原則ですが、受講生の理解度や質問に対応するため、進度等の一部が適宜変えられることもあります。講義では学術用語も出てくるでしょう。そこで、大切なのがノートの取り方です。ノートには、板書だけではなく、教員が話したことを書き取ることも大切です。講義の要点、重要なキーワードを逃さずノートに書いていきましょう。後で見返したときに、講義の内容を思い出せるようなノートづくりが求められます。

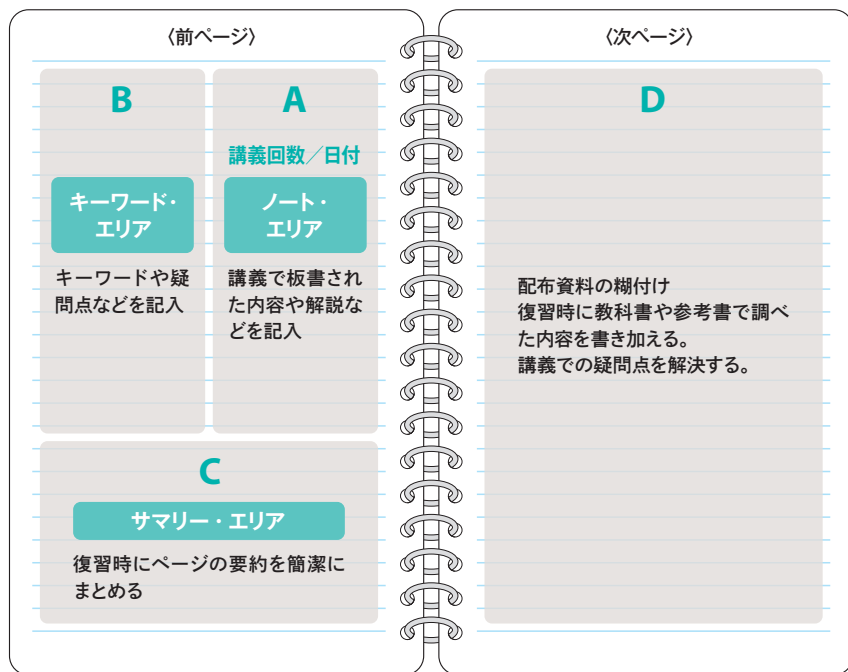
中学や高校時代と違って、教員はノートに取るべき内容を細かく指示しません。授業をよく理解することに注力し、理解をさらに深めるために自分なりに工夫してノートを取る必要があります。ノートは、復習にも役立ちますし、定期試験やレポートの提出時などには授業を振り返るために不可欠なものとなるでしょう。また、履修した授業で取ったノートの蓄積は、卒業論文・卒業研究などに向けても、貴重な財産となるはずですよ。



良いノートをつくるための方法を一つ紹介します。授業中にはノートの上半分（または左ページ）だけを使い、下半分（または右ページ）には、後で整理し、まとめたものを記載するようにします。また、疑問点が出てきた場合には、後で教員に質問できるように、そこに記述しておきます。

この作業は、授業の内容について鮮明な記憶のあるその日のうちに済ませておくことがベストです。こうしておけば、復習にもなり、講義内容が整理された良いノートが残せるようになります。

■ ノートのレイアウト例（コーネルメソッド参考）



出典／日本大学法学部 佐渡友 哲教授・編著 2011、『大学入門—政治と経済を学ぶマナーとスキル』北樹出版

Message

講義の受講スタイル

友達と学習し知識定着を確認し合う

松戸歯学部 4年 樽川 祥



1年次は教養科目の履修がほとんどなので受講スタイルは高校時代とそれほど変わらないものでしたが、2年次になると授業ががらりと変わり、戸惑いました。

解剖学や組織学、生理学などの基礎医学に関わる専門的な講義がスタートしたからです。馴染みのない内容のうえ専門用語が多く、講義内容が難しく感じられました。

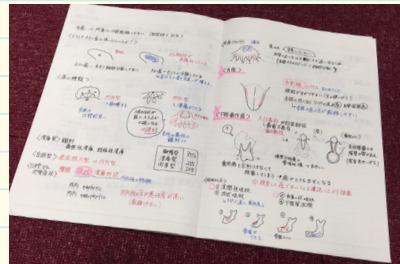
また、板書を使った形式だけでなく、先生からレジュメが配付される、プレゼンテーション形式の講義が多くなりました。レジュメが用意されていると、大事なことはそこにまとめてあると考え、先生の話はメモ程度で済ましてしまいがちです。しかし、私は先生が繰り返したことや「大切」と言ったことは赤字で、その周辺知識は青字でノートに書き留めるようにしました。そのノートには、講義の要点がまとめてあるため、一からレジュメや教科書を見直さなくても、効率よく復習ができました。

試験前は、専門用語を書いて覚えるなどのインプットも大事ですが、知識を使うなどのアウトプットをすると、より知識が定着すると感じています。

アウトプットの方法は、2つあります。1つ目は、講義で学んだ知識が、試験で

どのような形式で出題されるか知るために、歯科医師国家試験の過去問を解いてみることです。2つ目は、分からない点は、友達と互いに質問し合うということです。私はテスト2週間前くらいから、食堂などで友達と一緒に学修しています。友達から質問されたことを自分の言葉で説明すると、自分の思考も整理でき、知識定着に役立ちます。説明できなければ、自分が理解不足とわかるからです。その場合は、もう一度ノートに戻り、復習し直します。

3年次からは実習が多くなり、さらにアウトプットの機会が増えました。講義で学んだ知識を実際に実習で活用できると、これまでの自分の学習サイクルが間違っていなかったのだと、自信がつかってきました。将来は、臨床医を目指しているので、5年次からの臨床実習が楽しみです。



ノートに細かく書き留め、復習に役立っている。

※学年は取材時（平成28年度）のものです。

2 演習（ゼミナール）

》演習での学び方

演習は、「ゼミナール」とも呼ばれる授業の形態の一つです。少人数の学生が特定のテーマについて自主的に研究し、発表や討論を行います。講義は、多人数が収容できる教室で教員の話聴くスタイルが主流ですが、演習は、学生がより積極的に授業に参加することが前提です。自らが調査・研究した特定のテーマについて発表したり、ほかの学生の研究発表を聴いたりして、互いの発表を基に討論します。それによって、様々な学問的刺激を受けることができます。

また、こうした活動を通して教員から親しく指導を受け、ほかの受講生とより深い交流ができるのも、演習の大きな特色です。発表の仕方や討議の方法、さらにはこれに付随する人間関係など、演習（ゼミナール）から学べることは数多くあります。ぜひ、積極的に参加してください。



演習の様子。

》プレゼンテーション

演習（ゼミナール）では、学生が研究発表をする機会が多くあります。最近のプレゼンテーションは、効率的に理解を得られるようパソコンのプレゼンテーションソフトウェアを使うことが多くなっています。無料でダウンロードできるソフトウェアもあり、マニュアル本も数多く出版されているので、使い方を学ぶことをお勧めします。

また、発表要旨とは別に、スライド画面をA4用紙1枚に6画面程度、順番に記載したものをプリントして配布資料にすると、より効果的な発表になります。



学生によるプレゼンテーションの様子。

最近では、学会*でも企業でも、パソコンを活用した発表が増えています。演習でプレゼンテーションソフトウェアを使って研究発表した経験は、卒業後にどのような道に進んだとしても役に立つはずですが、この使い方をマスターしましょう。

プレゼンテーションの際には、決められた時間内に発表することが大切です。事前に、友人に聴いてもらうなどしてリハーサルを行うとよいでしょう。

》ディスカッション

ディスカッションは、教育方法の一つとして重要なものです。他の学生の考えを聴いて学ぶ、違う意見を合わせて一つにまとめる場面では、ディスカッションは優れた方法です。バズセッション*、パネル・ディスカッション*、ディベート*などの手法があります。他の学生の意見を尊重し、相手を誹謗^{ひぼう}したり人格を傷つけたりしないことなどが基本的なルールであり、自らの意見を主張する際には、正しい論拠と論理が求められます。

ディスカッションをするには、事前の準備が必要となります。自分の意見が述べられないのは、話す能力が足りないからと思いがちですが、下調べや自分の中での考えがまとまっていないことが原因の場合があります。しっかり準備をして、自信をもってディスカッションに臨めるようにしましょう。

学会

学術研究者の団体。また、その会合。

バズセッション

まず、参加者が少人数グループに分かれて自由に討議。そこで得られた結論をグループの代表者が発表し、さらに参加者全体としての討議を進めるといった、演習に用いられる手法の1つ。

パネル・ディスカッション

異なる意見をもった数人の討論者（パネラー）が聴衆の面前で一定の論題に関して討議し、その後、聴衆も討議に加わって、質疑応答や意見発表を行う座談式公開討論法。

ディベート

ある主題について、異なる立場に分かれて議論すること。

Message

ゼミの受講スタイル

視野を広げ、学びを深める

文理学部 哲学科 2年 高山 百合香



文理学部哲学科では、2年次にゼミが始まります。私は、宗教学を専門とする小林紀由ゼミに所属しています。私が小林ゼミを選んだ理由は、2つあります。

1つ目は、1年次に受けた小林先生の「宗教学」の授業に感銘を受けたからです。授業で先生は、社会学などを織り交ぜ宗教について解説してくれ、広い視野で宗教について考えるきっかけになりました。また、レポート課題では授業の学びを社会でどう生かすかまでを考えることが求められ、自分の考えを深めることができました。高校時代とは異なり、主体的に学びを深める面白さを知り、本格的に先生の下で学びたいと思ったのです。

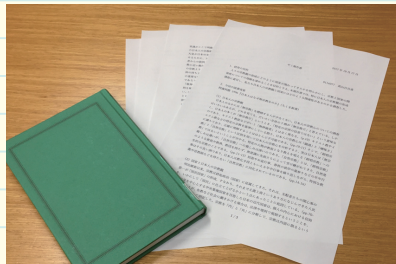
2つ目は、研究スタイルです。小林ゼミでは、各自が興味のある本を読み、その内容を報告書にまとめ、2～4年生のゼミ生の前で発表します。その後、報告書の書き方と内容について意見をもらいます。私は「日本人の宗教心」に関する本を読み、報告書をまとめました。先生や先輩から、適切な場所で改行しておらず文章が読みにくいといった点や説明不足でわかりにくい点を指摘され、客観的に自分の文章を見直し、書き方や伝え方も工夫しなければならないと思いました。

他のゼミ生は、「アニメに見る宗教心」

や「フランスの宗教の世俗について」など、自分とは全く違う観点で宗教について研究していて、とても興味深いです。大学では、様々な人の価値観や考え方に触れながら学びたいと考えていた私にとって、小林ゼミの研究スタイルは、まさに理想的でした。

同じ哲学科のゼミでも、一冊の教科書を輪読するゼミ、ギリシア語の文献を翻訳するゼミなど様々なスタイルがあります。ぜひゼミを見学して、先生や先輩の話聞くことをおすすめします。

また、ゼミでの学びを深めるためには、自ら積極的に動くことが大切だと感じています。私は、自分の興味のある書籍だけでなく、先輩が参考文献として挙げてくれた書籍も読むようにしています。少しずつ興味を広げていき、卒業論文で扱う研究テーマを見つけたと思います。



本には直接書き込み、それを報告書の考察にまとめる。

※学年は取材時（平成29年度）のものです。

3 実験・実習・実技

》ねらいと効果

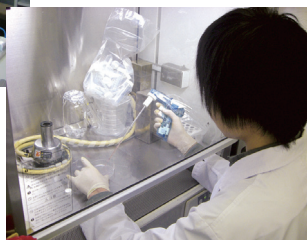
講義や演習（ゼミナール）は、研究成果や研究の対象・手法を教員が論述し、特定の研究テーマについて教員の指導の下で発表・討論することが中心となる授業形態ですが、実験・実習・実技科目では、それ以上に、学生自らの体験と行動を通して、学修の結果をより確実なものとするのが求められます。

実験・実習には、分析装置や観測機器の使い方に習熟するとともに、学生自身が分析データ・測定データを得ることにより、あらかじめ設定した仮説に対する解答を出すというねらいがあります。授業のねらいと到達目標に関する教員の説明や指示に十分に耳を傾け、細心の注意を払って取り組むようにしましょう。



実習の授業風景。

実験の授業風景。



》予習とレポート

実験・実習・実技科目の授業を受ける際に最も重要なのは、あらかじめ、どのような課題について授業が行われるかを予習することです。

何が大切であるか、ということが危険であるか、何を修得するための実験・実習・実技であるかを事前に知っておくと、理解も早く、事故などを未然に防ぐことができます。

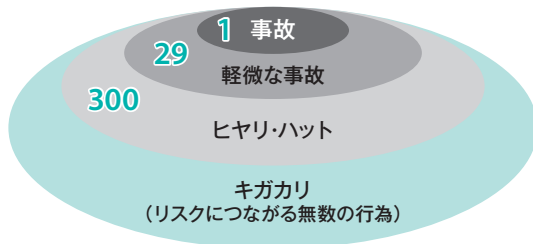
また、実験・実習・実技科目では、終了後、その日のうちにレポートにまとめることも重要です。新鮮な記憶があるうちに記録しておかないと、次第に忘れて、レポートや論文が書けなくなってしまうからです。

実験・実習・実技科目が好きになり、良い成果が得られるようにするコツは、**授業前の予習と、授業後にレポートをまとめる習慣をつける**ことです。

》安全の確認

実験・実習・実技において絶対に忘れてならないのが、**安全の確保**です。「**ハインリッヒ*の経験則**」にあるように、1件の重大な事故や災害の背後には29件の比較的軽微な事故・災害があり、さらにその背景には300件のヒヤリ・ハット*が潜んでいるといわれています。つまり、重大な事故や災害を未然に防ぐには、一歩間違えば事故や災害の発生に結びつきかねないヒヤリ・ハット、あるいは、キガカリの段階で対処しておくことが重要です。

■ハインリッヒの経験則



事故・災害は決して不測の事態ではなく、配慮の不

ハインリッヒ

Herbert William
Heinrich

(1886-1962年)

アメリカの数学者。損害保険会社の技術・調査部で安全技師を務めた。労働災害の発生確率を統計的に解析し、1929年に発表した論文で経験則「ハインリッヒの法則」を提唱した。

ヒヤリ・ハット

幸い事故には至らなかったものの、一瞬ヒヤリとしたりハットとしたりしたこと。

足から生じたと考えるべきなのです。

実験・実習・実技の授業では、指導教員やティーチング・アシスタント（TA）*、スチューデント・アシスタント（SA）*による注意事項の説明に十分に耳を傾け、常に細心の注意を払ってください。体調が十分でないことに起因する事故も起こり得るので、睡眠不足に留意し、体調管理に気をつけることは、事故を防ぐ観点から重要です。

安全面から、実験・実習・実技それぞれの授業内容に適した服装で受講してください。実験では白衣、場合によっては実験用保護メガネ・手袋等の着用が必要です。野外で実習を行う場合には、雨、日差し、虫よけなどの対策を万全に行い、調査にふさわしい靴の着用を心掛けましょう。また、事故を防ぐため、出水や雷など天候の急変に対する指導教員の指示には、迅速に従ってください。

》グループ行動

実験・実習・実技の授業は班単位で進められることが多く、自ら率先して参画するとともに、グループの一員として役割を分担し、協力し合うことが重要です。実験器具・観測機材などの準備と片付けも積極的に行い、授業中には記録をこまめにとるようにしましょう。



河川環境調査の実習風景。

ティーチング・アシスタント（TA）

科目担当教員の指示により、学部の実験・実習等の教育補助を行う業務の総称、もしくはその担い手である大学院学生。

スチューデント・アシスタント（SA）

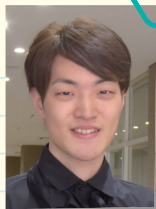
コンピュータ科目や実験・実習科目等のほか、受講に際しての留学生への対応や、ハンディのある受講生等への学習補佐を行う学部学生。

Message

実験・実習・実技の受講スタイル

ノートの活用で学びの質を高める

生物資源科学部 暮らしの生物学科 3年 加藤 日向



暮らしの生物学科の3年次前期には、「微生物学実験」「バイオサイエンス実験」という2つの実験科目があります。実験を進める上で役だったのは、2年次までの授業で学んだ基礎知識です。

「バイオサイエンス実験」では、ある動物の肉片が与えられ、そのDNAを抽出して電気泳動などを行い、どのような生物のDNA情報であるかコンピュータ解析の結果から推察します。授業でDNAを抽出する手法を学びましたが、実際に手を動かすのは初めてです。先生に指示された予習とは別に、関連する1・2年次の教科書やノートを見直し、重要事項や図はノートに書き写すようにして実験に備えました。

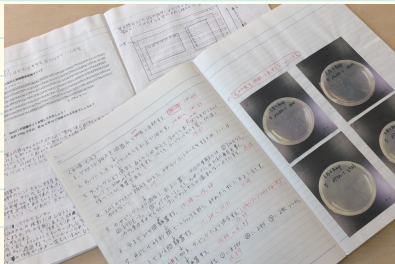
実験中は、状態の変化や数値などを細かくノートに記録するようにしました。どちらの授業も2週間後にある次の授業までにノートに考察を書いて提出するため、実験中のメモが役立ちました。こうした事前準備や実験中の一手間で、学びが深まることを実感しています。

実験は、4人程度の班で進めましたが、考察の書き方や学びの深め方も人それぞれで、とても参考になりました。例えば、私は考察を書く際、図書館で関連する文献を借り知識を深めたり、情報の裏付け

を行ったりし、そこで得た知識もノートに残しておきます。仲間のなかには、インターネットを活用して、最新情報を教えてくれる人もいます。そうした仲間の意見を聞くと、新たなアイデアが浮かんでくることもありました。

実験科目で研究の面白さを知り、大学院進学を目指したいと考え、より学びの質を深めるためのノートづくりを先生に相談しました。先生からは、自分の思考の記録が残せ、実験結果の偽装にならないようノートをボールペンで書くようにアドバイスを受けました。より美しい字を書くためにペン習字にも通い始め、復習するときにも読みやすいノートを書くように心がけています。

3年次からはゼミに入り、本格的な実験・実習が始まります。今はまだ準備段階ですが、これからの研究が楽しみです。



実験中の様子や変化の起こった時刻なども書き込む。

※学年は取材時（平成29年度）のものです。

4 論文・レポート

》心構え

大学での学びにおいて、論文やレポートを書くことは必ず求められます。論文を書くという場合、卒業論文がその代表的なものですが、学部・学科によってその内容には違いがあります。書き方や文字数については、担当教員の指示に従うようにしましょう。

学問研究は、先人の研究成果（先行研究）の上に自身の学修・研究内容を上乗せするものであり、徹頭徹尾、先人の研究成果の学びを参照しない研究はありません。つまり、学術論文を書くためには、書こうとしている分野や課題についての先行研究を学ぶ必要があります。大学に大きな図書館が存在するのはそのためであるとも言えます。

レポートを書く場合、教員が課題名や書式を指示してくれるか、シラバスに記載があります。これらの指示に従って執筆しましょう。



レポートには、文献研究による報告、実験・調査結果の報告、アンケート・インタビュー調査の報告など多様な類型があります。学術論文と比較すれば、書くという作業の大きさは軽減されますが、これらを完成させるための緊張感は同じです。

文献研究は、論文と同じような手法を取ります。アンケートやインタビュー調査では、あらかじめアンケートする項目やインタビューする質問などを吟味し整理しておきましょう。自分が主張したいことを念頭において、これを調査によって検証し、論証しながら書き進めることが大切です。また、グラフや図表の使い方に習熟し、適宜レポートに挿入すれば、より見やすいレポートとなるでしょう。

》論文・レポートを書くための情報収集

論文・レポートを書くためには、書籍や論文、雑誌などの資料を効率的に検索できるよう、図書館での情報収集の仕方をマスターすることが大切です。インターネットが普及した現在では、学生自身のパソコンや携帯端末でも書籍や論文を検索し、読めるようになってきました。大手書店の書籍検索機能を活用するのもよいでしょう。

また、パソコンに内蔵されている文書作成機能を十分使いこなせるよう、親しんでおくことが大切です。写真や図表の取り入れ方ももちろん、注釈や参考文献の挿入方法など学術論文の書き方もマスターしておくといよいでしょう。論文作成時の起承転結の付け方なども、理解しておくべきです。論文・レポートの書き方に関する本を熟読しておくことも重要です。

論文にせよレポートにせよ、書き方をマスターする王道はありません。指導を受けている教員にできるだ

けならって、日頃から書く訓練をしておきましょう。

》絶対にしてはいけない「無断引用」

論文やレポートは、自らの考えを書くものですが、先行研究を無視して書くことはできません。必要に応じて、他者の文章を「引用」することがありますが、出典を明らかにするなど、いくつかの最低限のルールがあります。ウェブ上の複数のページから文章をコピー&ペーストし、レポートを上げるといったことは、ルールに則らないばかりか、そもそも自分の文章を書く力を成長させる上でもマイナスなので、絶対にしてはいけません。

》よい論文・レポートを書くためのコツ

論文・レポートを書くには、読書力が問われます。読書なくしては、よい論文やレポートを書くことはできません。必要だと思った図書は、精読することが大切です。あるいは、パソコンに感想文などを書き込みながら読むのも一つの方法です。自らの専門分野の周辺領域の論文なども、必要に応じて目を通しておくと良いでしょう。これらの書籍や論文の引用文献や参考文献を見れば、自分自身の学修に役立つ関連の文献を容易に見いだせるはずです。



あなたにとって、大学図書館はどのようなところでしょうか。

授業のテキストや参考書を読んだり、本を借りたり、コピーをとったり、資料を取り寄せたりするところ、または、新聞や趣味の雑誌を読むところ、映画等の視聴覚資料を見るところ、課題をこなすために情報の手掛かりを得るところ、仲間とワイワイ意見を交換し学びを高めるところ、でしょうか。

大学図書館は、これらすべてに「YES!」と答えます。大学図書館は、学生の皆さんの知らないうちに、^{へんぼう}変貌しています。

「居場所」としての図書館

今までの大学図書館は、静かな雰囲気の中で、主に学生が個別に学修する場を提供してきました。

しかし、これからの図書館は、可動式の机、椅子、ホワイトボード等を備えて、自由な議論や意見交換の場や、仲間とともに課題をこなす場も新たに提供していきます。

学生の皆さんは、他のグループや他の人の活動を見て、ヒントを得たり、さらに課題を深く掘り下げたり、意見交換を活発にしたりすることもあるでしょう。自分一人の学修では気づかなかったのに、他の人の意見を聴いて、気づくことがあるかもしれません。一緒に何かをすることは、人にとって欠かせない欲求です。

まるで洪水のようにあふれる情報が身の回りにある今、的確な情報にたどり着くためには、仲間の助けが必要です。

次世代の人に必要な力を定めたものに、「21世紀型スキル」があります。その中で、世界情勢や自然環境の刻々たる変化に対応するには、常に学び続けていく力や、多様な価値観を持つ人と議論して、起きている問題を特定し、協働で解決していくことが必要とされています。

大学図書館という空間・場を使って、授業が行われることもあります。使いたい資料は、すぐ手の届くところにあります。大学図書館は、皆さんの「知りたい、伝えたい」を実現するところ です。

「情報源」としての図書館

自由な議論の中で、気になることが出てきたら、紙の資料だけでなく、パソコンを使ってデータベースや電子資料を調べることもできます。

探している資料がどこにあるかを検索するには、OPAC (Online Public Access Catalog) を活用しましょう。

所属する学部図書館に所蔵のない資料は、他学部図書館や他大学図書館などから借りたり、コピーを取り寄せたりするほか、実際に閲覧に行くこともできます。手続きの方法は、カウンターで相談してください。



ミステリー仕立ての図書館ガイダンス (理工学部船橋)

図書館で使えるデータベースには、日本語のデータベースもあります。

これらのデータベースでは、新聞記事を探したり、言葉の意味を知るのに、複数の辞書を同時に調べたりすることもできます。

最近では、各種データベース、図書館のOPAC、電子ジャーナルなど、どの資源を利用するかを気にせずに、情報を手にできます。調べたいと思う「言葉」をボックスに入力するだけで、情報が入手できる仕掛けが開発されているからです。日本大学でも、その仕掛け（ディスカバリーサービス）を使うことができるようになりました。

大学図書館は、皆さんにとって、身近な情報の宝庫です。気軽に調べて、新しい仕掛けも、どんどん利用してみましょう。

検索したら、オリジナル資料にぜひ当たってみてください。大学図書館に

は、ベストセラーのほか、良書がそろっています。良い本は、人の心を豊かにし、人生を変えることもあります。

学生を支援する図書館

本学図書館は、『自主創造』の教育理念が身に付くお手伝いをしています。全学生は、どの学部の図書館でも学生証で利用することができます。

各学部では、学生ボランティア団体等が学生協働活動を展開しています。学生目線で図書館を身近で使い易くするためにゲーム形式の図書館利用ガイダンス、選書ツアー、スピーカーを招いて交流するカフェ等様々な企画を複数学部合同で実施しています。他学部の学生とも交流できます。これらの活動を通じて、情報を使いこなす能力はもちろん、プレゼン能力も身に付ききます。あなたも参加してみませんか？
(研究推進部学術情報管理課)

成績評価

1 成績評価と単位

》「成績評価」の意味

「成績評価」は、履修した科目の学修成果を一定の指標に基づき評価された結果を意味しています。各科目の学修成果を「成績」として客観的に捉えることにより、これまでの取り組みを振り返り、卒業までの履修計画を立てる上で重要な参考になります。

また、教える側の教員は、授業をより効果的に展開するため、「成績評価」を通じて学生の授業に対する理解度や参加度などを把握しています。

大学も「成績評価」の結果などを総合的に分析し、教育の質向上に努めています。

なお、「成績評価」の方法や基準は、授業科目ごとに異なり、シラバスに記載されています (p.31 参照)。しっかりと把握しておきましょう。

》「単位」の意味

「単位」とは、大学における学修量を測るために数値化した一定の基準のことをいいます。大学の教育課程では、個々の授業科目ごとに設定された「単位」を積み重ねていきます。修得した単位が卒業要件を満たすことによって修了し、学位*を授与されるのです。

学位

p.27「学位の授与」を参照。

2 必要な学修時間

》1単位の授業時間は？

授業科目の単位数は、大学設置基準^{*}で、「1単位の授業科目を45時間の学修を必要とする内容をもって構成することを標準とし、授業の方法に応じ、当該授業による教育効果、授業時間外に必要な学修等を考慮して」単位数を計算することと規定されています。

日本大学は、大学設置基準に基づき制定された「日本大学学則」により、授業科目の単位計算を次のとおり定めています。

種別	1単位に要する授業時間
講義、演習科目	15時間から30時間までの範囲で学部等が定める時間の授業をもって1単位
実験・実習・実技科目	30時間から45時間までの範囲で学部等が定める時間 ^(注1) の授業をもって1単位

(注1) 芸術学部における個人指導による実技の授業については、15時間の授業をもって1単位とする。

※講義、演習、実験、実習または実技のうち2つ以上の方法により授業を行う場合については、その組み合わせに応じ、上表に規定する基準を考慮して学部等が定める時間の授業をもって1単位とする。

※教育上必要と認められる場合には、修得すべき単位の一部について、時間制を採っている。

単位制は、上の表の単位時間を基礎として、授業科目の種別に応じて必要な時間数に基づく単位を定める制度です。授業科目を履修し、授業科目ごとに定められた試験等に合格すると、単位が認定されます。

》予習・復習も必須

授業科目の単位は、授業時間に加え、学生が行う予

大学設置基準

大学を設置し運営していくに当たり必要な最低の基準を定めた文部科学省令。

習・復習などの授業時間外学修によって構成されています。講義科目を例として説明すると、毎週1時間の授業を15週行って1単位としているため、大学設置基準で規定されている「45時間の学修を必要とする内容」を満たすには、1授業科目に対して2時間の授業時間外の学修が求められるわけです。

■講義の場合

$$\begin{array}{l} \text{授業時間 1時間} \\ + \\ \text{授業時間外の学修} \\ \text{(予習・復習など) 2時間} \end{array} \times 15 \text{週} = 45 \text{時間の学修}$$

〈例〉

予習	授業	復習	× 15週 = 1単位
1時間	1時間	1時間	

つまり、授業時間に加え、予習・復習の時間も単位に含まれると考えられています。授業の理解を助けるために、レポートや課題などが課されることがありますが、この単位の持つ意味（単位の実質化）をよく理解し、真剣に学修に取り組んでください。課題が特に与えられなくても、履修した授業内容を自分のものにするために、予習・復習を習慣づけることが必要です。

なお、大学では、45分を「1時間」と計算しているため、90分間の1授業時間は「2時間」となります。例えば、2単位の講義科目の場合は、1授業時間（90分）の授業を15週行い、30時間確保していることから、当該授業科目の単位数として2単位が与えられる、というように考えます。

3 GPA 制度

》GPAとは

日本大学では、厳格な成績評価、綿密な履修指導による卒業生の質の保証などを目的として、GPA (Grade Point Average) 制度を導入しています。GPAとは、「成績評価基準」(次ページ参照)に従い、授業ごとの成績評価にそれぞれ定められた係数 (Grade Point) を付与して、1単位当たりの平均値 (Grade Point Average) を算出する成績評価方法です。

次ページの「GPA計算式」に示されているとおり、GPAは、評価された成績とその科目の単位数が関係づけられて算出されるので、単位制の概念に照らして考えても、履修する授業科目によって求められている“学修の重み”が異なっていることが分かります。

国際的に通用性があるとされるGPAは、海外留学などの際に大学での学びを示す指標となることもあります。

》履修登録→成績→振り返り

自分の学修効果を把握して、主体的に履修計画を立てることが大切です。学期末や年度初めに配布される「成績表」や「成績発表システム」に示されたGPAを検証しましょう。その学期や学年における学修を振り返り、次学期や次年度の履修計画を立てる指標となります。いったん履修登録した科目は、履修中止をしない限りGPAの対象となるので、自らが責任を持って履修登録することが求められます。

このような学修プロセスを通じて、「自主創造」型人材の気風を養うことが重要です。

成績評価基準

	素点	評価	係数	内容	GPA
判定 合格	100～90点	S	4	特に優れた成績を示したもの	対象
	89～80点	A	3	優れた成績を示したもの	
	79～70点	B	2	妥当と認められたもの	
	69～60点	C	1	合格と認められるための成績を示したもの	
不合格	59点以下	D	0	合格と認められるに足る成績を示さなかったもの	対象外
無判定	—	E	0	履修登録をしたが成績を示さなかったもの	
	—	P	—	履修登録後、所定の履修中止手続きを取ったもの	
	—	N	—	留学や編入学などにより、修得単位として認定になったもの	

GPA計算式

$$\frac{\left(\frac{4 \times S \text{ の }}{\text{修得単位数}} \right) + \left(\frac{3 \times A \text{ の }}{\text{修得単位数}} \right) + \left(\frac{2 \times B \text{ の }}{\text{修得単位数}} \right) + \left(\frac{1 \times C \text{ の }}{\text{修得単位数}} \right)}{\text{総履修単位数 (S+A+B+C+D+E)}}$$

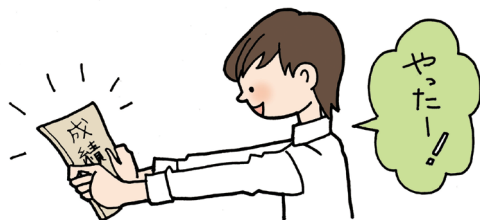
※分母には、P（履修中止科目）およびN（認定科目）は含まず、GPAには算入しない。

※GPA算出の対象科目は、学科の課程修了に係る授業科目（卒業論文・卒業研究・卒業制作を含む）である。

※「成績証明書」では、合格した授業科目の成績（S、A、B、C）および認定科目（N）のみを表示する。従って、不合格科目（D）や履修登録をしたが成績を示さなかった科目（E）および履修中止手続きをした科目（P）については、「成績証明書」に表示されない。

※D評価またはE評価となった科目を再履修しない場合は、GPA算出の際、総履修単位数として分母にそのまま残るので、注意が必要。なお、D評価またはE評価となった科目を再履修した場合、累積のGPA算出の際には、最後の履修による成績および単位数のみを算入する。

※GPA制度の詳細は、学部等で配布される『学部要覧』などを参照のこと。



GPAの計算は、成績評価とその修得単位数が関係しています。個々の授業科目の単位は、学部等のカリキュラム・ポリシーに基づき必要な学修時間等を勘案して設定されており、いわゆる“学修の重み”を表しています。また、GPAの値を求める際、分母に不合格となった科目（D評価）だけでなく履修登録をしたものの成績を示さなかった科目（E評価）の単位数も含むため、しっかりと履修計画が必要であることが分かります。

例えば、下表に掲げた4人の学生の履修状況を見てください。4人の履修状況を比較すると、一見、CやDの評価を得ていないXさんの成績（B・A・A）が良いように見えますが、GPAの値で比較すると、4人の学生のうち最も優れているのは、Wさん（2.75）

です。また、2科目でS評価を得ているにもかかわらず、4単位の1科目を途中で受講しなくなってしまったためにE評価となり、最も低いGPAの値となったZさん（2.00）のようなケースもあります。

つまり、GPAは、授業科目によって異なる単位数が成績の重みづけとして反映された評価であること、また、履修登録をしたものの途中で受けなくなったり（所定の手続きにより履修中止した科目は除く）、不合格になったりした科目も含まれた評価であることを認識しておく必要があります。

GPA制度では、計画的な履修と着実な学修が求められます。GPAの値は、大学生としての皆さんの行動特性を表すものでもあるのです。（学務部学務課）

	〇〇学 [4単位]	〇〇論 [2単位]	〇〇語I [2単位]	GPA
Wさん	S 4 × 4 単位 = 16	C 1 × 2 単位 = 2	B 2 × 2 単位 = 4	$\frac{16+2+4}{8}$ 2.75
Xさん	B 2 × 4 単位 = 8	A 3 × 2 単位 = 6	A 3 × 2 単位 = 6	$\frac{8+6+6}{8}$ 2.50
Yさん	A 3 × 4 単位 = 12	D 0 × 2 単位 = 0	S 4 × 2 単位 = 8	$\frac{12+0+8}{8}$ 2.50
Zさん	E 0 × 4 単位 = 0	S 4 × 2 単位 = 8	S 4 × 2 単位 = 8	$\frac{0+8+8}{8}$ 2.00

※評価ごとの係数は、S=4、A=3、B=2、C=1、D=0、E=0
参考／半田智久2011、『成績評価の厳正化とGPA活用の深化』地域科学研究会

4 授業評価

》授業評価の趣旨

日本大学では、「学生による授業評価」が、大学全体で組織的に行う教育の改革・改善活動の一環として行われています。学生の皆さんは、授業ごとに実施される授業改善アンケート調査に参加することが大切です。大学は、調査の結果を分析して、授業の問題点・反省すべき点を洗い出し、授業の改善や学修効果の向上を図るよう努めています。

さらに、「学生による授業評価」では「きちんと出席したか」など、受講生自身の授業に対する態度も合わせて問うことにしています。

》学生による授業評価の意味

「学生による授業評価」のアンケートには、決められた項目だけではなく、授業の進め方や教員の授業方法について自由に記述する欄も設けられています。大学では、学生の皆さんの率直な意見や日ごろ感じていることなどに関する記述内容を、アンケート結果とともに教員に届けています。教員は、これを基に、学生の学修効果の向上に向けて、授業の改革・改善を図ります。

つまり、学生の皆さんの声によって、授業は改善されていきます。大学の授業の内容や進め方は教員だけの考えで決められるのではなく、そこに**学生の意見が反映され、授業の改革・改善が行われていく**わけです。この点に「学生による授業評価」の意味があるのです。

快適な学修環境のために

1 日本大学の学修支援体制

》日本大学の教育環境を積極的に活用しよう

大学に入学したばかりの皆さんは多くの期待を持つ一方、大学はどのようなところだろうか、大学の授業内容についていけるだろうか、人間関係はうまくいくだろうかなど様々な不安を抱えていると思います。

日本大学では、各学部皆さんの学修をサポートする教務課、生活支援や奨学金対応などを行う学生課、就職支援を行う就職指導課など、時間内であればいつでも利用できる窓口を設置し、支援体制をとっています。また、全学的にクラス担任制等を取り入れ、入学から卒業まで特定の教員が直接皆さんと向き合いサポートする体制も整えています。

また、様々な理由により大学で学んでいく意欲が湧かない方や対人関係で悩みを抱えている方なども、是非こうした日本大学の充実したサポート体制を活用して充実した学生生活にするとともに、よりよい学修環境を積極的に整えていきましょう。



2 キャンパス内マナー

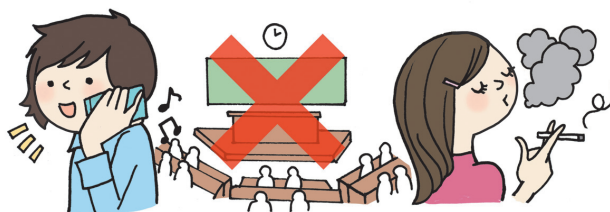
》学修マナーを守ろう

学生にとって、大学は学びの場として楽しくありたいものです。楽しいキャンパスライフを有意義に過ごすために、最低限のルールは守らなければいけません。

授業は大学の中核となる活動であり、私語は厳禁です。心無い私語は、場合によっては人権侵害になりかねません。静かに授業に取り組んでいる学生を妨害することは、学生の学習権の侵害になるからです。

また、正当な理由なく授業に遅刻することも、担当教員や他の学生に迷惑をかけることとなります。近年、大きな問題となっているのは携帯端末に関するマナーです。教室での携帯端末の使用や充電はマナー違反なので、絶対にやめてください。

キャンパス内の決められた場所での飲食・喫煙なども当然のルールです。学生をはじめとする大学人全員が楽しく過ごせるキャンパスは、まさに学生の皆さんが創り出すものです。



3 人権侵害

》人権侵害のない学修環境維持のために

日本大学では、「人権侵害防止ガイドライン」や「セクシュアル・ハラスメント*防止に関する指針」などを定め、基本的人権を侵害するような差別的取り扱いにより、個人の尊厳を不当に傷つける行為を禁じています。人権は難しいものではなく、誰でも心で理解し、感じることでできるものです。人権について正しく理解し、一人ひとりの人権を尊重する意識と行動により、人権侵害のない快適な環境を保っていきましょう。

主な人権侵害には、次のようなものがあります。

- 性・国籍・民族・人種・出身地・信条・性的指向・身体・健康などに関する差別
- セクシュアル・ハラスメント*
- アカデミック・ハラスメント*
- アルコール・ハラスメント*
- インターネットを利用した誹謗・中傷
- ストーカー行為、デートDV* 等

》人権侵害を「しない」「させない」ために

- 誤った知識や偏見、差別をなくし、互いの人権・人格を尊重することが重要です。
- 相手が拒否し、嫌がっていることが分かった場合には、同じ言動を繰り返さないようにします。拒否されないことを同意や合意と勘違いしてはいけません。
- 問題提起する人をトラブルメーカーとみなしたり、人権侵害を当事者間の問題として無視したりせず、声をかけて相談に乗りましょう。「見て見ぬふり」は、人権侵害への加担とされる場合があります。

セクシュアル・ハラスメント

相手の意に反する性的言動により、相手に不快感や不利益を与え、学修環境を困難にさせること。略して「セクハラ」ともいう。

アカデミック・ハラスメント

教育・研究上の優越的な地位や権限を利用して行われる不適切で不当な言動・指導・待遇により、相手の学修環境を困難にさせること。

アルコール・ハラスメント

飲酒やイッキ飲みの強要、意図的な酔いつぶし、飲めない人への配慮を欠くこと、酔った上での迷惑行為（暴言・暴力、ひんしゆく行為、セクハラ等）。

デートDV

交際相手を怖がせたり、傷つけたりして、自分の思いどおりに動かそうとする態度や行動。

》人権侵害の被害に遭ったら

黙っていたり、無視したりしていても状況は改善されません。かえって行為者に、その言動を容認していると誤解され、エスカレートする場合があります。不快だという気持ちを、相手に対してはつきり伝えることが大切です。一人で悩まず、信頼できる人や人権相談オフィス*に相談してください。

》人権相談オフィス

人権相談オフィスでは、学生からの相談を受け付け、学内外の関係分野の専門家（弁護士・医師・臨床心理士・看護師・保健師）である人権アドバイザーが、面談を通して問題解決のプロセスを策定します。相談者は、相談したことによって不利益を被ることはありません。相談者の意思を最大限尊重し、プライバシーを守ります。

詳しくは、「人権侵害防止リーフレット」や「人権侵害防止・解決ガイド*」のウェブページをご覧ください。



人権相談オフィスの
連絡先

TEL. 03-3221-2562

平日 10:00～18:00

土曜日 10:00～12:00

「人権侵害防止・解決
ガイド」のURL

[http://www.nihon-u.
ac.jp/hras/](http://www.nihon-u.ac.jp/hras/)

4 社会的問題

》社会的問題を起こさないために

学生生活を楽しく安全に過ごすには、社会的なルールや大学の規則などを守ることが大切です。特に未成年の飲酒や薬物などへの誘惑には絶対に乗ってはいけません。

近年、SNS（ソーシャル・ネットワーキング・サービス）などへの不用意な投稿が社会的問題になっています。SNSは、便利なコミュニケーションのツールです。人々を結びつける機能を持ち、多くの企業や大学などでも利用されています。

しかし、投稿のルールや規則が曖昧で、情報の真偽が見えにくいものもあります。特に匿名のSNSでは傍若無人の振る舞いが多く、動画サイトへの投稿なども問題視されているとおりです。

SNSを使って自分の意見を表明し、書き込みをすることは、意義がないわけではありません。しかし、その書き込みが見知らぬ人々を傷つけることがあります。ネットの向こう側にいる人を攻撃したり、不愉快にしたり、傷つけたり、人権侵害になることも起こり得ます。同時に、自分自身をこれらから守るにも細心の注意を払う必要があります。一人の大人として、自分自身に責任を持ち、しっかりとしたルールを確立しておくことが望まれます。



企画・編集

全学FD委員会教育情報マネジメントワーキンググループ

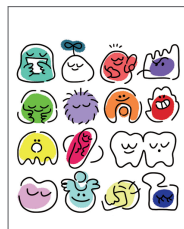
リーダー	藤田 之彦 (医学部教授)
メンバー	臼井 哲也 (法学部教授)
	吉田 健一 (文理学部教授)
	保苅 佳昭 (商学部教授)
	大貫進一郎 (理工学部教授)
	根本 修克 (工学部教授)
	八町 斉 (学務部学務課課長)
	後藤 裕哉 (学務部学務課課長補佐)
	濱野 泰三 (学務部学務課主任)
	芳 祥子 (学務部学務課主任)

表紙イラスト

芸術学部 デザイン学科 2年 田中紅緒 ※平成 29 年度時の学年

●コンセプト

日本大学の多様な学問領域からなる 16 学部の個性をそれぞれ愛嬌のある形にして表現しました。



このガイドブックは、本文などに記載した方々をはじめ、多くの方々や関係部署の御協力により作成されています。この場をお借りして、感謝申し上げます。

※本ガイドブックに記載した役職、資格等については、平成 30 (2018) 年 12 月現在のものです。

『日本大学FDガイドブック』に関する新たなアイデアや御意見などがありましたら、学務部学務課 (adm.aca.eps@nihon-u.ac.jp) へお寄せください。

日本大学FDガイドブック

— “自主創造” のための Learning Guide —

発行日 平成 31 (2019) 年 4 月 1 日 第 8 版

発行者 日本大学FD推進センター

センター長 落合 実

〒102-8275 東京都千代田区九段南 4-8-24

電話：03-5275-8314 FAX：03-5275-8315

e-mail：adm.aca.eps@nihon-u.ac.jp

所管部署：日本大学 本部 学務部学務課

日本大学FD推進センターウェブサイト

<http://www.nihon-u.ac.jp/fd-center/>



FD推進センターでは、本学のFDに関する取組や『日本大学FDガイドブック』をはじめとする各種発行物などをウェブサイトに掲載しています。ぜひ、ご活用ください。

本書に掲載した文章、写真、イラスト、図版等の無断転載・複製を禁じます。

Copyright ©Nihon University 2019 All Rights Reserved.

